

延川県で、最も有名な民間芸術は、剪紙と布堆画(アップリケ)です。布堆画にも延川県独自の雰囲気があります。布堆画とは、剪紙と同様の窓飾りなどの装飾品を布で作ったもので、元々は陝北の女性達の日常の針仕事から生まれたものです。昔の農村には、「新しい服は3年着て、古着として又3年、破けたら繕って又3年着る」と言う言葉があります。

子供は遊んで、男性は野良仕事で、衣服の肩や膝の部分がすぐすり切れますが、陝北の女性達はこの繕い仕事に素朴な美意識を発揮しました。継ぎ当てをするにも、補強をするにも、形を切り出して、細かい針目で縫い付け、いろいろ工夫をして、日ごとに新しい模様を考えながら、針を動かすのです。

小さな子供の靴のつま先に穴が開くと、手先の器用な母親は、虎の頭を布で切り抜き、靴の先に縫い付けて、「虎靴」を作り上げます。

枕に穴が開けば、適当な布を探し出して、草花や動物などの形を縫い付け、アップリケ付きの枕を作り上げます。布団が古くなると、別布で丸い模様や「双喜」字の模様を作って縫い付けました。

それがだんだんに、新しい衣服、特に子供服には、

花や鳥の模様、虎や獅子の模様を縫い付けて、

可愛くて恰好良い服を作るようになりました。

布堆画制作の材料は、主に農家の婦人たちの手織りの布で、色も赤・黄・青・黒・白など様々です。端切れや裁ち屑を使うこともあり、色や形がまちまちで、出来上がりも一様ではありません。

一般的な制作の過程は、先ずどのような模様にするのか構想を練り、絵を描いてサンプルを切り出して見ます。それから、模様に従って配色を考え、布地の上に並べたり、つなぎ合わせたり、はめ込んだり、積み重ねたりして、縫い合わせ、細部を整えて作品に仕上げます。小さなものは一人でもできますが、大きな図案になると何人かで協力して作り上げます。

布堆画の題材は、民話・伝説、伝統劇の主人公、民族の風習、動物・花鳥風月などなど広範囲からいろいろ選ばれています。嫁入りに持ってゆくものなら伝統的なお目出度い図案の「蓮花に戯れる魚(夫婦の愛情を醸す)」、「蓮花に子供(賢い子供が授かる)」、「蛇と兎の図(長寿で富を成す)」などが使われます。

陝北の、手先が器用な女性たちは、端切れを利用して、子供の為に虎の帽子、虎の枕カバー、獅子の靴、腹掛けを作ったり、色の綺麗な布を選び、お目出度い図案で新郎新婦の枕カバーなどを作ったりします。

おめでたい図案といえば、先にも書きましたが、「蓮花に戯れる魚」、「麒麟が子を授ける(賢い子が授かる)」、「蓮年貴子(毎年子を成す)」、「石榴の実(多産の願い)」、「太った子供(子を授かる願い)」などで、結婚の喜びを表し、夫婦の睦みあいや恵み豊かな生活を祈るのです。

その他、「孫悟空」、「虎」、「犬」などの模様で布堆画を作成して人に贈って喜んでもらったりしま



高鳳蓮の布堆画は、大きくて有名だ



最初に作られた門神布堆画。高鳳蓮と筆者(1996)

す。このようにして、布堆画は、徐々に、壁掛けとして鑑賞の対象となる芸術性のあるものに育っていきました。

高鳳蓮の布堆画は剪紙の図柄に基づいていますが、剪紙と布堆画は材料が違うので、剪紙と比べると、更に簡略化された分、躍動感が増し、陝北で出土する漢代墳墓の石刻像を見るようで、生气に溢れています。色遣いは一般的な刺繍と同じですが、刺繍に比べると模様が布面で刺繍より広いのでより鮮明で強烈な印象を与えますし、図案がよりシンプルで、豪快・素朴で独特の雰囲気があります。

陝北布堆画の独特な雰囲気は、もともとこの地方で伝統的に受け継がれて来たもののようなものです。高鳳蓮につながる布堆画の流れは次のようなものです。

第一代は、清代末に、延川県賀家湾園則河村から嫁いで来た人で、“とても器用な婦人”として

知れ渡っていましたが、本名は分かりません。当時の常として文字は読めませんでした。この女性は生涯を通して剪紙と布堆画を作り続けましたが、特に布堆画が好きだったようです。彼女の作品として、“<sup>ダーリエン</sup>襪襪”と言って、今でいうポシェットのような袋に一对の鳳凰をあしらったものが残っています。

第二代は、延川県上湾村から嫁いで来た女性で、名前は楊四姐と言ひ、布堆画が上手でしたが、作品は残っていません。

第三代が、楊四姐の娘の高鳳蓮です。高鳳蓮の嫁ぎ先は同じ延川県文安駅鎮白家塬<sup>バイジャーユアン</sup>(台地)村です。

高鳳蓮は、布堆画と剪紙を同時期に始めましたが、布堆画の製作は工程が煩雑で、時間が掛かるので制作数が少ない上、作ればすぐ売れてしまうなどの理由で残っている数が非常に少なく、資料の収集はかなり困難です。

剪紙は、一般的に6～8枚の紙を重ねて剪るので、同じものが6～8枚できますが、布堆画は1枚しかできません。取材に行っても、完成した布堆画が、前日に売ってしまったということもありました。作者自身に、自分の作品を撮影して保存するという習慣がありませんから、布堆画は記録に残りにくいのです。

高鳳蓮の布堆画は、剪紙の伝統的な図柄を踏まえて制作されているように見受けられます。様々な

色の布を張り合わせたり重ねたりしつつ針仕事の技法を駆使して、竜王・門神・財神などに加えて民間伝説、風土と人情、現実生活も織り交ぜて、華やかに様々な物語を展開させています。

掲載の門神図は、剪紙の図案をそのままに、門神が左手で竜の首を捉え、右手に竜の身体を乗せ、花の冠の上に竜の尾を垂らして、門神の威力を誇示しています。金色の魚型の



布堆画門神



剪紙門神



布堆画財神



剪纸財神

眼を見開き、髭を蓄えて、見る人に恐れを抱かせます。強烈な原色を組み合わせ、色を重ねて重厚な立体感を出しています。間が抜けたような雰囲気がありながらも、威風堂々と、白馬に跨った姿が印象的な作品です。

財神は、頭に金銀財宝の冠を頂き、両手で金塊を捧げています。大きな両耳は肩まで届くほどに垂れ下がり、この上なくお目出度い福相をしています。身体には、一対のカササギ(中国ではお目出度い鳥とされる)を帯びて、お目出度い雰囲気をもりあげています。

高鳳蓮は、このような作品の他に、布堆画を施した布を使ったバッグ・ショルダーバッグ・札入れ・状差しなど、実用性と審美性を備えた作品も作り、人気商品となっています。

話しは布堆画に関わらない余談になりますが、1997年の春節、外国人に開放さればかりの延川県は、初めて外国からの観光客の一行を迎えました。日本の版画家・田井光枝さんをリーダーとする一行8名と、中央美術学院民俗学部の日本人留学生を加えた9名が広大な黄土高原の文安駅郷の山上に到着しました。広大ではあっても痩せて乾いた黄土の大地に住む人々が心から温かく自分たちを迎え

てくれる様子に日本の客人たちは、次々に感じたことを述べました。

「黄土高原って人類のふるさとって感じね」

「人々は素朴で、質朴な生活を送る黄土高原。長い間、変化を知らないできたこの土地がとても気に入ったわ」

一行のひとり、抗日戦争期、中国で生まれ育った女性が図らずも言いました。

「とても気持ちの良い人たちばかりだし、景色も雄大で素晴らしい。心の中で焦がれていた故郷に戻って来みたいだわ」

当時は未だ外に向けて開かれていなかった陝北黄土高原の小さな山村に、一度に多数の日本人がやって来たことは、村人にとっても大いに見聞を広げる機会でした。映画やテレビで見る日本人は凶悪で憎むべきものですが、ここに現れた人々は、話す言葉は違いますが、顔つき、皮膚の色、服装など殆ど彼らと同じで、而も礼儀正しいのです。高鳳蓮のヤオトンにこんなに多くの日本人が訪れたことで高鳳蓮の面目も立ったことでした。

高鳳蓮の剪纸作品を見て、日本人一行はびっくりしたようでした。高鳳蓮の作品は、94年に北京で紹介され、世界婦人代表大会期間中に展示され、作品は、外国の人々および都市の専門家・学者たちの好評を博しました。私は先に「陝北四女性の剪纸」を編纂し、彼女の剪纸を系統的に掲載しましたが、その後5・6年を経て、高鳳蓮の作品は大きな変化を遂げていました。

作品のサイズが大きくなり、作品の勢いが増すにつれ、作品は益々個性的になってきました。昔風の手のひらサイズの窗花(そうか)は見られなくな

り、代わりに四半切・半切・全紙、更には何枚かの赤い全紙を貼り合わせて作成した大作が多くなりました。内容もまた、単一の動物・草花・人物・十二支などから、パノラマ式画面・叙事詩などの大型作品に変わって行きました。

高鳳蓮は、人類の先祖・聖人、帝王君主、村人たちの変化に富んだ生活、楽しく忙しい仕事、幸せを願い喜びを迎える気持ちなど全てを、自己の画面の中に取り入れようとしているようです。

千里の道を遥々やって来た日本人たちは、中国民俗文化についてある程度の知識を持っていましたが、高鳳蓮の、これまで見慣れたものと異なる目新しい作品に驚きを隠せなかったのです。丁度、私が初めて高鳳蓮の作品を目にした時と同じでした。

中国民間芸術に興味を持った田井光枝さんと岩田温子さんは、その後、別々に現地を訪れ、高鳳蓮の作品の他、安塞県の侯雪昭、洛川県の韓菊香らの剪紙作品多数枚を購入し、翌年1997年5月、'わんりい'(当時は、まだ「つるかわ中国文化研究サークル」と称していた)の協力を得て、二人で町田市立国際版画美術館で、「果てしなく広がる黄色い大地の華・黄土高原の剪紙展」を開催しました。

2003年5月のある日、延川での2年間の職責を終了する前に、私は高鳳蓮が住む白家塬と、高鳳蓮に別れの挨拶をするために訪れ、彼女と手を取り合って、長年お互いが気に掛けていたことを話し合い



腹掛・蓮に戯れる魚

ました。それは、彼女が私の住む都市で展覧会を開きたいと望んでいることです。私は手段を考えて、出来るだけ早く実現するように尽力すると約束しました。

高鳳蓮の作品は、国内外の多くの芸術機構が収蔵しています。中国美術館は、彼女の布堆画「財神」、「黄帝」、「関

羽」、「土地の神」などの作品を所蔵しています。彼女の作品は又、フランス・ドイツ・アメリカ・台湾などの国や地域の多くの収集家によって所蔵されています。

「人民日報」、中央テレビ局、「東方時空」など10社以上のメディアが、彼女に関する特別報道をしています。2001年6月26日、中央テレビ局は「幸せな老後」という番組で彼女の特集を放送しました。2004年6月には、中央テレビ「博物館めぐり」で取り上げられました。

国家の“特別功労賞”などの取得は十数回におよび、2004年4月には、ユネスコが主導した“母なる大河を巡る”「中国無形文化遺産伝承者リスト」に選ばれて登録されました。

著名な剪紙研究家・勅之林氏は、高鳳蓮を評して言います。「私は、高鳳蓮が中国一の剪紙作家だとは言いません。しかし、彼女の作品のような剪紙作品は他にありません。彼女の剪紙作品のようなものは、世界中どこにもないといえます」。中国美術館の楊力舟館長は言います。「世界にピカソあり、中国に高鳳蓮あり」と。

A poster for a paper-cut exhibition. The top part of the poster has the text "はてしなく広がる黄色い大地の華" in blue and red. Below this is the main title "黄土高原の剪紙展" in large, bold black characters. Underneath the title is the subtitle "中国陕西省に見る生命と豊穡への祈りの形" in smaller black characters. The central part of the poster features two large, intricate red paper-cut designs. The bottom part of the poster contains event details in a blue box with white text, including dates, times, and contact information. The background of the poster is white with some faint text and graphics.

町田市における剪紙展チラシ(1997年)